「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第６回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「空手サークルと大学時代」

甘粛省　陳賀廉

空手道に触れた２年近い時間は、一生忘れることはないだろう。

２年余り前、私は蘭州大学に進学し、内蒙古自治区のフフホト市から甘粛省に来た。地域文化などの違いから大学生活にすぐには馴染めなかった私は、学内でとても寂しく過ごしていた。私は、ずっと「憧れていた大学生活とは、どこに“隠れる”かということだったのか？」と自問してばかりいた。

ひょんなことから、私は学内の空手サークルと出会った。私は小さい頃から痩せていて弱々しく、大学に入ってからもずっと体調は余り芳しくなかった。同じ寮の杜君が、空手サークルに参加するように提案してくれたので、ちょっと試してみるかと思い、私は空手サークルに入った。空手サークルに参加して最初の指導で、空手は元々“唐手”―つまり、“中国に源を発する武術”の意味―と呼ばれていたことを監督から教わった。。500 年前、古来の格闘術と中国から日本へ伝わった拳法とが混ざり合って成立したのだという。空手が中華の武術とこれほど深い縁があることを知り、私は空手を学ぶ決意をした。こうして空手とともに過ごす大学時代が始まったのである。空手の初歩的な技術を練習するところから始まり、今では自分が学内空手サークルの会長を務めている。私は多くの空手の技を習得したが、得るところがより大きいと感じるのは、空手の精神をある程度味わえたことである。

思うに、空手は個人の身体や技能の鍛錬ではなく、一種の精神の試練である。空手には真、善、美に関する極めて深い論理が含まれており、実質上、動態の禅なのである。

サークルの皆も、私の空手に対する解説と悟りは、私自身の空手の技巧より遥かに強く表れていると感じている。実際、私が空手を学んだ時間はとても短い。会長選挙には勝ったが、それは、技が他の人より強かったからではない。空手サークルへの興味が強く、空手文化に対する理解が深いというところを先生が見ていたからである。そのため、サークルでは、空手文化に対する理解と伝承に力を入れ、動作の訓練に終始しないように努めてきた。

この過程で私は多くの人と知り合った。私と同じように空手と空手文化に強い情熱を抱いている人たちである。彼らは私から空手文化についての解説を聞くと、進んで私の友達になろうと言ってくれた。その理由を聞くと、答えは大同小異で「空手そのものより空手の文化を好む人は、仁徳のある人だから。そういう人と友達になれば、気持ちが落ち着く。」というものだった。そのため、空手サークルを通じて私には専攻の異なる友人がたくさんできた。彼らは、このサークルの一人一人のメンバーを“空手の人”と呼んで楽しんでいた。毎週、“空手サロン”の時間になると、空手の人としては、どう身を処すべきかについて皆で語り合った。サークル内で、道士の世界よりも静寂な内心の世界を得てしまう者さえいた。前会長である陳先輩は、私に会う度、「廉君、君は実践重視のサークルを頭でっかちにしたうえ、こんなにたくさんの学生を引き付けておくとは理解し難いな！」と声を掛けてきた。私の答えは「先輩、そういう含みのある褒め方こそ、まさにある意味で空手文化の表現ですよ。」である。言い終わるなり、二人で納得して笑ったものでる。

二年が過ぎたが、空手サークルへの愛は全くすり減ってはいない。空手サークルは、サークル史上初めて“蘭州大学サークルベスト 10”に入った。優秀サークルコンテストで、私は「陳先輩の

言うように、サークルは、実践重視から理論重視に移行する時になって初めて、人の心へ入っていくことができる。一個人が一サークルを文化的に認めたら、その人はそのサークルに対して十二分の情熱を持ち続けることができる。」と発言した。

　この頃を振り返ると、空手サークルに関わっていた隙間にこそ、私の最もすばらしい大学時代が潜んでいたことに気付いた。私の大学時代は、空手サークルによって永遠に忘れ去ることができないものになったのだ。